みなと MOTOMACHI ケンチクさんぽ vol.3

公益社団法人 日本建築家協会 近畿支部
兵庫地域会　地域まちづくり委員会

まちの片隅の小さな存在

2015年、神戸市が都心の未来の姿［将来ビジョン］を策定する際に、神戸で活動する建築家としての意見をまとめよう、と呼び掛けてもらったことをきっかけとして、その後乙仲通界隈でのワークショップ等にも関わり、私は活動拠点としている神戸北部の農村地域から度々元町地区を訪れることとなりました。

農村の移動手段は専ら車なので、山を越え、トンネルを抜け、山手幹線から坂を下りきったあたりで車を停め、そこから目的地まで歩いていくことが多いのですが、市営の花隈駐車場が安くて便利なのでよく利用します。

用事を終え、帰りみち、JRの高架下を抜けると駐車場入り口に面して登り坂があります。花隈城址の石垣に沿った歩道は公園の樹々に覆われ、曲がりくねった坂のその先は見えません。ここをほんの少し登ったところにお地蔵さんが祀られているのをご存じでしょうか。

路傍に佇む小さな地蔵が、さっきまで歩いてきた直線的な通りや建築群からなる、賑やかで華やかな商店街とはかなり様相が異なるこの場所をさらに特色づけていて興味深いです。

今回は、この界隈にあるお地蔵さんを巡り歩いてみることにしました。

基壇に「長狭北向地蔵尊」の銘板が付けられたこの地蔵（写真①）の玉垣には、複数の料亭の名前が刻まれています。花隈はかつて150軒を超える料亭やお茶屋が並ぶ一流の花街で、伊藤博文ほか歴代の総理大臣をはじめ、多くの著名人が訪れたそうです。このすぐ近く、坂の途中にある厳島神社の玉垣にも「花隈芸妓協同組合」と刻まれています。花街の多くの女性たちが下駄を鳴らしてこの辺りの坂を上り下りし、お地蔵さんにも手を合わせていたのでしょうか。

そこから東方向にある兵庫県警本部の敷地の南西角には、不動明王像が建っていて、その足元にいくつもの小さな古い石仏があります。お社の両脇に地蔵があり、その周辺にも複数の石仏があります。（写真②）規模が大きい割には何の説明板もなく、どんな縁起で誰が管理しているのかは分かりませんが、毎年地蔵盆で賑わっているようで、掃除や供え物などお手入れも行き届いています。

兵庫県庁の北東角、山手幹線を挟んで向かいにある地蔵（写真③）の基壇には「老人クラブ中四長栄会～昭和六十一年六月吉日建之」と書いてあります。なるほどお社も中の地蔵も比較的新しいようです。毎月第一日曜にお地蔵さんの前でラジオ体操とその後のコーヒーブレイクのイベントを開催しているようです。

山の手小学校から掘割筋を下って山手幹線に交わる場所にある地蔵（写真④）には「掘割地蔵尊～平成十四年吉日」と書かれていますが、隣にある山手自治会の掲示板には「第61回地蔵盆開催のお知らせ」が貼られていました。地蔵の磨滅も少なく、近年に再建立されたものと思われます。

走水神社から数十メートル西方面、走水通に面して、ちょうど人の目線と同じぐらいの高さに小さなお地蔵さんが安置されています。（写真⑤）個人住宅と思われる敷地の塀に接しています。水やりや花の交換はこちらの方がされているのでしょうか。だとしても、お社の扉は通りに対して開かれ、前を通る誰でもが手を合わせ、祈ることが出来るような設えです。

メリケン波止場前、みなと公園の南西角に建つお堂にはメリケン地蔵が祀られています。（写真⑥）説明板には阪神淡路大震災からの岸壁の復旧工事のため一時移転をしたあと、平成9年に元のこの位置に復帰したいきさつが書かれています。地蔵盆の寄付協賛者名簿もあり、多くの個人、事業者、商店街等の団体からの支援を受けていることが分かります。

他にも三宮センター街の繁盛地蔵尊、北長狭通のビルにある北向地蔵尊、不動坂とパールストリートの交点にある叶地蔵尊など、有名な地蔵が三宮近辺にもあり、それらのご利益について書かれた史料も多いようです。

このように、つくられた時代も管理する人や団体もさまざまなお地蔵さんが市街地の中に点在しています。名前もないお地蔵さんが路地の中にもっとあるのかもしれません。

先の神戸の［将来ビジョン］には、地蔵のことは書かれていません。その存在はあまりに小さく、大きな「ビジョン」にとっては検討に値しないものかもしれません。しかし、これら地蔵はこれまでのように、時に移動し、時に再建立されながら、林立するマンションの寿命が尽きたその先も長く存続するでしょう。

そのような、小さいけれど、まちの記憶を喚起させてくれるような地蔵たちを探しながら、まち歩きをしてみるのも楽しいのではないでしょうか。

①

②

③

④

⑤

⑥

みなと神戸は坂のまち

花隈周辺は坂道だらけで、南北方向だけでなく東西方向にも結構な勾配の坂があります。曲がりくねっていたり、上ったかと思ったら下りになったり、突然階段が現れたり、電車が眼下を行き交ったり、、、。

マンションが多いのですが、まち自体が迷路のようで、歩いていて退屈しません。ここが盛り場だったころ、坂道の傾斜に沿って並んだ料亭や置屋の行燈が灯っていた光景は、どんなに美しく楽しかったことでしょう。

神戸の［将来ビジョン］には、坂道についての記述も見られません。「歩いてめぐって楽しいまち」という方向性には共感しつつも、そのための強みであるはずの、一方で障壁にもなり得る坂道についてどのような議論がなされたのか分からず、私は十分に納得することが出来ません。

乙仲通界隈デザインワークショップで私たちは、界隈の古くて不便で複雑な迷路のようなビル群がもたらす豊かさ、楽しさについて語り、そこに真に包摂的な社会の実現に向けた可能性を見出したのですが、今、この多くの坂道で構成されたまちの運命に対して、消失しつつある乙仲のビル群のそれと同じような懸念を覚えずにはいられません。

ただ、坂のまちがこの先どのように計画され、姿を変えていこうとも、地蔵は都市の隙間を縫って存在し続け、擦り減った柔らかな表情でまちを見守り続けてくれることでしょう。

村上 隆行（むらかみ たかゆき）
eu建築設計　代表　／一級建築士
／（一財）淡河宿本陣跡保存会代表理事／淡河町商工会副会長
／2015-2016年度乙仲通界隈デザインワークショップ実行委員長